

【論文名】 Scaling the leaf length-times-width equation to predict total leaf area of shoots

【資料名】 Annals of Botany, mcac043 (Published Online): 30 March 2022.

【論文 URL】 <https://doi.org/10.1093/aob/mcac043>

「葉 1 枚の面積は長さ と 幅の積に比例する」の式を枝レベルに拡張

【著者】 小山耕平（帯広畜産大学 環境農学研究部門）,

Duncan D Smith（Department of Botany, University of Wisconsin, USA）

【解説】

地球上の生物は、それぞれの環境に適応した多様な形態を持っています。例えば、植物の葉の形は種によって大きく異なります。そのため、植物の形態などを研究する際、1つの種で見つかった法則が他の種で成立しないことが多くあります。しかし以前から、地球上の様々な気候帯に生育する非常に多くの植物種に対して、「同種内で葉 1 枚の面積は長さ（注 1）と幅の積に比例する」という関係が成立することが知られています。この関係を利用して、いくつかの葉を採取して比例係数を測定しておけば、それ以降は葉が植物に付いたままの状態でも葉の長さ と 幅を測定すれば葉面積が簡単に計測できます。この関係式は、植物学だけでなく森林科学や園芸学など様々な分野で応用されています。

今回、世界で初めて、陸上植物の互いに大きく離れた分類群（単子葉類、モクレン目、真正双子葉類）から選んだ植物 5 種に対して、この関係式をシュート（枝、注 2）レベルに拡張しました。1本のシュートには、様々な大きさの葉がついています（例えばコマツナ）。そのため、1本のシュートの合計葉面積を求めるためには、それぞれの葉の面積を測定して合計する必要があります。しかし、1本のシュートにしている葉の集団をまるごと大きな 1 枚の葉とみなし、大きさの異なるシュートを比較したところ、全体が同じ形を保持したまま拡大・縮小した関係（注 3）になっていることが分かりました。1枚の葉の時と同様、この葉の集団の「長さ」と「幅」の積を求めたところ、全体の合計葉面積と非常にきれいな比例関係が見つかりました。さらに、「長さ」と「幅」のどちらか一方だけでも、かなり良い精度で合計葉面積を推定できました。つまり、シュート全体の中で一番大きい葉の長さを測定すれば、シュート全体の葉面積が推定できる訳です。

森林など生態系全体の光合成は、1枚 1枚の葉の光合成の合計値です。そこで、葉の光合成の地球温暖化に対する応答などの葉 1 枚レベルの生理学的知見を、個体および生態系全体の理論（アロメトリーやスケーリングの理論）へと統合していく際に、大きさや性質の異なる葉を足し合わせる、という今回の結果および理論が重要となります。

（注 1）「葉の長さ」とは、正確には「葉身長」（葉の平らな部分の長さ）のことです。葉柄（葉と茎をつなぐパイプの部分）は含みません。また、「葉の幅」とは「葉身幅」のことです。

（注2）シュート（shoot）とは、日本語の「枝」に相当する語句で、1本の茎と、それに付いている葉、花、果実、芽をまとめてシュートと呼びます。木本にも草本にも使います（例えば、根を除いたコマツナやチンゲンサイ1株は、茎の短いシュート1本に相当します。）日本語の「枝」は、主に樹木について、葉を含まない茎の部分のみを指す場合があるため、植物学ではシュートを用いることも多いです。

（注3）直感的には、大きなコマツナと小さなコマツナは全体として引き延ばしたような、同じような形をしているということです。